白金薮

９月号

平成２９年９月発行　　第７９号

白金葭定例句会案内（於て　アビスタ）

十月二十日（金）正午～三時第三兼題：鶇、朝顔の実
十一月十七日（金）正午～三時第五兼題：石蕗の花、木の葉
十一月三十日（木）ゴッホ展一時～五時東京文化会館
十二月十五日（金）正午～三時第五兼題：マスク、人参

兼題句参考句（10月20日分　鶇、朝顔の実）

鶇死して翅拡ぐるに任せたり　山口誓子
樹齢という静かな数字つぐみ来る　宮崎斗士
冬萌やこゑなき鶇田にまぎる　石川桂郎
四五十羽山わをめぐる鶇かな　中勘助
山の平らに影すつて消ゆ群鶇　松村蒼石
穂芒に鶇と見しが沈みけり　篠田貞次郎
鶇つぐみ枯土手歩み胸を張る　高志
朝顔の種を割りたる掌　呂仙
二三日朝顔の実を乾してをり　正一郎
実ばかりの朝顔おのれ巻さがる　三鬼
朝顔の実の枯れ枯れてまだ採らず　虚子
書評など書く用朝顔青き実を　青邨
朝顔の実にふれ遠き昔あり　晴子
朝顔の種太りけりはぜにけり　三樹
朝顔の種をとばして垣を解く　越翁

月例句会報（'17／9／22　9名欠5　美術の秋、秋鯖）

雅兄高志主宰　飯田孝三

志賀直哉と鬚がそつくり照穂草（近代文学館探訪）
妻の撰よる同じ絵葉書美術展
ジャコメッテイの狗肩おとす秋黴雨（ついり）
秋鯖や黒潮幾重逸りきて
秋鯖や女子会弾む斜向ひ

増田陽一

房総の闇は濃からず烏瓜
鷺鴉影の重なる秋である
二科展彫刻縞馬の紛れ込む
大ぶりの秋鯖むしるボスポラス
舞踏会の手帳燕は南國に

光成高志

秋鯖の味噌煮（りばて）を食っていざ句会
リバティ・プリント（てい）の無数の孔雀美術展
大利根の長堤駆くる空は秋

踏切を渡る左右に曼珠沙華
紫蘇の実の塩漬け作る七十五歳（ななじゅうご）

火膨れのでき秋鯖の焼き上がる
モスリンの壁なす白布美術展
躓いてばかり尾のなき蜥蜴ゐて
モンローの唇となる凌霄花
片身買ふ二人住ひの秋の鯖

光　みち

院展を出でて征く日の遠からず
ランボオ読みし若さ戻らぬ夜長かな
水槽を掬はれてゆく秋の鯖
芙蓉咲き物語宇治十帖へ
夜長し旧姓の名の鯨尺

松村幸一

新涼の湯の町に買ふこけしかな
秋鯖の味噌煮卓袱台のある夕餉

吉羽多美子

初孫の婚約を聞く敬老日
足弱に美術の秋も遠くなり
雨戸引く飛び込むでくる虫の声

倉田紀子

妻と子を愛し院展入選す（従兄に）
院展に日傘預けて入場す
砂山に茱萸の種吐き安吾の碑
海鳴りや芭蕉布捧ぐむかしあり
大笊の秋鯖に塩一つかみ

浅野正美

美術の秋友と集ひて上野まで
送り火やひときわ燃えて風にのる
梨届く大きいものからお裾分け
匂ひ来る振り向きて見る金木犀
秋鯖を焼いて夕餉を独りする

武者昭七

さまざまの思い出のあり遠い夏

雲の峯崩れて白雨地を叩く
東京水と言ふて売り出す秋の水
近江路を駆け抜けて来る鯖の秋（若州鯖街道）
大空に神立つと見て白雨来る

磯目健二

秋鯖や天日塩振り寝かすなり
葭原や利根縹渺と遠筑波
鯖街道枯葉も載せて徒荷かな
秋天や絵筆のさきに河光る
黄落や絵を観て帰る地獄門

佐藤宏之助

乾し終へて天日に煙草透かし見る
団栗の木が教養部の要
キャンパスの稲刈る農学部総出
栴檀の駅前広場美術の秋
酒は剣菱秋鯖は塩焼きに

青木啓泰

秋鯖を見るだけ見てくる那珂湊
秋鯖のふつくら煮付け神消える
水戸へ出て美術の秋を探しけり
曼珠沙華発作で咲きし畦一本
ぬかご飯塩あんばいの日和かな

仲本興正

ミロやダリ上野につどふ美術展
秋鯖の味噌煮と母の鼻歌と
東大の裏口入る秋の蝉
ヒマラヤ杉の幹のふとぶと天高し
櫻樹いま秋の日の斑をこぼすのみ

田宮敦子

珍穴子餌に林立す夏休
コーヒー飲む鳴らぬ風鈴ゆれてをり
棗の実大師ですます遍路かな
アニサキスいるかいないか秋の鯖
西郷像美術の秋の上野山

一句鑑賞　　光成高志

舞踏会の手帳燕は南國に　　陽一

舞踏会の手帳とは戦前の仏蘭西映画の題名です。イタリアの豪邸に住む夫を亡くしたばかりのクリスチーヌは、夫の遺品を焼却処分している時ふと取り落とした一片の手帖。それはクリスチーヌが一人前の女として初めて舞踏会に出た折のダンス相手の男の名を書き記したものでした。あの時の十人の若者達は、どうしているのであろう。20年ほど前の手帖を手に、かつて自分に愛を語ってくれた七人の男たちを歴訪するオムニバス映画です。訪れた男性はどうなっていたか、美輪明宏さんがユーチューブで語っている。作者は人生のはかなさを歌い上げる感じのこの映画と帰燕を取り合わせたのです。両方とも人生の寂しさが思われますがそうでしょうか。あれほどぺちゃくちゃ舌を繰って日本で鳴いて暮らした燕が今は南国に帰って行った。又来年帰ってくる。あの映画だって今も見られる。作者の想いは読者にゆだねられています。

酒は剣菱秋鯖は塩焼きに　　宏之助

日本酒は、食べ物と同時に口に入れるお酒として作られているとか、下戸の筆者にはわかりませんが、作者はそれをよくご存じなんでしょう。口中に剣菱と食べ物が同時に入って、もぐもぐ咀嚼しているうちに、酒と食べ物が最上のハーモニーを奏でる瞬間が、安易に訪れてくるところに剣菱が丁度いいとか、お互いの味の深さをグレードアップさせる酒らしい。食べ物としての秋鯖は塩焼きに限ると作者は主張しているようです。「は」の繰り返し、それに「に」と省略を効かし、又初めに還るリズム、お酒はぬるめの燗がいいとかいう演歌もありましたね、その世界にも通底しています。

葭原や利根縹渺と遠筑波　　健二

これは我孫子や加須などの利根川流域の景色を漢詩調で詠った佳句と思います。先に書いた「利根川図志」の世界でしょう。「縹渺と」という副詞が描写に良く効果を発揮していると思います。近景に葭原と利根川を配し、遠景に筑波山を配した、そう葛飾北斎の富嶽三十六景の我孫子版ですね。作者の故郷はここだという心が筆者に伝わりました。

大ぶりの秋鯖むしるボスポラス　　陽一

この句を読んで、ボスポラス海峡、トルコ、桂離宮の美を発見してくれたブルーノ・タウト、高崎の達磨寺の洗心亭、それに終焉の地のボスポラス海峡の橋のたもとの崖地の家、それに、大ぶりの秋鯖をむしるのはオスマン帝国の戦士というふうに連想して選句しました。陽一さんはかつてとトルコ周遊をされ「ファーブルの机」に

三十句載せられました。中に鮫と鰈の句があります。その経験から、秋鯖の兼題を詠われたのでしょう。

モスリンの壁なす白布美術展　　**みち**

渋谷から歩いて駒場への途次、松濤美術館に入り偶然、染織品の展示をみた時の句である。布に文様を付けるやり方には、五つあるとか。木版画や銅版画の要領で布に写すのを捺染、その上から金箔や銀箔を貼る印金・印銀、それに織、刺繍、絞の五つである。掲句のモスリンとは木綿や羊毛の梳毛糸を平織りにした薄地の織物の総称をいうとか、フランスのマリーアントワネットが来ていたシュミューズドレスがそれです。この白布が天井から壁一面に掛けられて展示されている様は美しく、秋の美術展にふさわしいと思います。

一句鑑賞　　磯目健二

秋鯖を焼いて夕餉を独りする　　**正美**

単身生活者の哀愁。秋の日の孤愁といえば、佐藤春夫の「秋刀魚の歌」が思い浮かぶ。春夫の詩は人妻との果たされない愛の苦衷を表白したものだったが、この句は愛する伴侶に先立たれ、ひとり残された者の寂しい日常風景である。共に生きた日々の追想と喪失の哀しみが底流にある。亡きひとへ寄せる相聞歌でもあるのだ

雲の峰崩れて白雨地を叩く　　**昭七**

上昇気流に乗って天高く威容を示していた入道雲が、突如電光と雷鳴を発し、怒相顕わに降下を始める。刻を置かず、黒雲に覆われた地上は、沛然たる俄雨に襲われる。有名な芭蕉の「雲の峰いくつ崩れて月の山」は登った月山へ捧げられたオマージュだが、この句は天と地の壮大な呼応を暗喩抜きで写生に徹して捉えた自然詠である。地上の強い雨脚や雨音までをリアルに一直線に直叙する表現が素晴らしい。

秋鯖の味噌煮卓袱台のある夕餉　　**多美子**

卓袱台の夕餉とあれば、戦前から戦後間もなくの庶民生活である。たとえば劇画「三丁目の夕日」が描く下町の時代風景だ。「秋鯖は嫁に食わすな」と古来いわれたほど、鯖は秋には脂がのって美味になる。しかも安く手頃な大衆魚であったから、その味噌煮は多くの家庭の夕餉によく出る御馳走だった。その頃は夕方になると家々から上がる炊煙で下町一帯が霞んだ。柱時計とラジオのある部屋で、子沢山の家族が団欒しながら夕食を摂った。そんな時代が日本にあったのだ。郷愁の句である。

ジャコメッテイの狗肩おとす秋黴雨　　**孝三**

スイスの彫刻家ジャコメッテイの有名なブロンズ「狗」が展覧会の一隅を占めている。街路を雨に濡れとぼとぼ歩く痩せさらばえた犬の像である。実物のリアリティ追

求だと作家は力説するが、彫像は体肉を削ぎ落とされて骨格だけにしか見えないシュールさだ。肩を落とし打ちひしがれて歩む、その姿形からは、作者自身も含めた生きる者の深い孤独のようなものが伝わってくる。彫像全体の憂苦に満ちた表情は、今も降り続く外の長雨の憂鬱に同期信号の如く重なる。

コーヒー飲む鳴らぬ風鈴ゆれており　　敦子

蛇笏の「くろがねの秋の風鈴なりにけり」は、山村の豪家の軒端に吊されたままの鉄製の風鈴が秋風に誘われて季節違いの蕭殺の響きを立てたのである。この句は、巷の喫茶店で属目した鳴らない風鈴である。コーヒーを飲んでいると、中庭の軒下に吊り下げられた風鈴が目に入った。風の通い路なのだが風力弱く音を出し切れないでいる。よく見ると風鈴本体だけは幽かに震えるように揺れている。風が十分にあれば、さえざえした音色を響かすのに、それが叶わぬ哀しみに風鈴は身を震わしているかのようだ。まるで雌伏忍従の我のように――とはやや深読み過ぎようか。

近江路を駆け抜けて来る鯖の秋　　昭七

若狭の海で獲れた秋鯖を京へ運ぶ鯖街道は幾つもあったが、琵琶湖の西岸を叡山下から大津へ出て京都出町柳に至る西近江路が主要ルートだった。傷みやすい鯖を塩でしめて早朝、小浜を出発し一昼夜かけて翌朝京に着いた。その頃に塩加減もちょうど良くなったという。晩年近江をこよなく愛した森澄雄に「若狭には仏多くて蒸し鰈」の句があるが、鰈や烏賊も同様に運ばれた。鯖が最も美味になる秋、日本海と京を結ぶ西近江路を徒荷で懸命に運ばれて来るのを、京の人々は待っていた。

海鳴りや芭蕉布捧ぐむかしあり　　紀子

奄美から八重山・先島まで沖縄全域の日常着だった芭蕉布が江戸時代の初め、薩摩藩の間接統治のもと租税として徴収されるようになった。米の採れない南西諸島の貢納品は、特産の布と黒糖と定められ、その納付に島民はさまざまな苦労を強いられ、苛斂誅求による悲話も数多く生まれた。今は平穏な美しい沖縄の海辺に立って、作者は悲しい過去の歴史を思い起こすのである。ちなみにかつては安価な庶民の着物だったが、現在は呉服市場で超高級の美布として扱われている。

一句鑑賞　　武者昭七

秋鯖を見るだけ見てくる那珂湊　　啓泰

わざわざ那珂湊漁港まででかけたのに秋鯖を買わずに帰ってきた、というのである。買わなかった理由は分からない。「見るだけ見てくる」といところに買い残したものの無念さがただようし、読者から見れば軽い滑稽味も感じられる。子供の頃店先に佇んで「見るだけですよ」

と母親にだめを押されたかなしさが胸を掠める。「見るだけ見てくる」というのも一つの人生かも。

秋鯖や黒潮幾重逸りきて　孝三

秋鯖そのものではなく、鯖の群れが乗り越えてきた幾重もの荒々しい黒潮の流れを「幾重逸りきて」と主題に据えたのが句に重量感をうんだ。句の後ろに鯖の群れがひたすら泳ぎ過ぎる景色が見える。

秋鯖の味噌煮卓袱台のある夕餉　多美子

無条件に懐かしい句である。家族が卓袱台を囲んだ居間はキッチンと呼ばれ椅子とテーブルが占領し、若者たちは味噌煮の皿なんか片隅に押しやってカップラーメン片手にスマホに熱中というのが現代の風景らしい。懐かしいものが次々消えていく時代であるのは寂しい。

大笊の秋鯖に塩一つかみ　紀子

「大笊」「一つかみ」が豪快なイメージを掻き立てる。漁港のマーケットでもあろうか。水揚げされたばかりの大笊に盛られた新鮮な秋鯖。そのきらきらとした輝き。ふりまく塩は漁師の手に余らんばかりににぎられて、げんこつみたいに大きく硬い。周りのにぎわいも伝わってくる。

送り火やひときわ燃えて風にのる　正美

盂蘭盆会の情景だ。はるばる冥界からやってこられたご先祖様がお帰りになるのだ。その別れのしるしだろうか、送り火がひときわ赤く燃えて風になびく。情景もしらべもやさしく清澄な句である。「風にのる」が秀逸。

曼珠沙華発作で咲きし畦一本　啓泰

「発作で咲いた」とは！とんだユーモア。おそれいりました。われわれだっていつこんな滑稽？に逢わぬとは言えぬ。気を付けましょう。

一句鑑賞　増田陽一

院展を出でて征く日の遠からず　幸一

今、展覧会を出た人物が間もなく戦地に赴くという。出品作家か、または美術鑑賞家かによって読みは違うけれど、いづれにせよ美術界とは「今生の訣れ」という気分であろう。掲句はその辺が巧みにさらりと記述されていて、暗示された悲壮感に含みがある。そしてこの設定にはかの「信濃デッサン館」「無言館」に遺されたような、戦没の若い画家たちの人生が直ちに連想される。「院展」は嘗て大観、春草、観山など巨匠の居た名門だから、この人物も宿願の入選を果たした後、戦地に向かったのかも知れない。

妻と子を愛し院展入選す（従兄に）　紀子

同じ「院展」でも、この句のめでたさよ。何のこだわりもなくすらりと出来ていて、平凡そうでありながら、そこが珍しい好句と思う。戦前戦後だったら、「美術展入

選妻と子飢えしめつ」などというムードで詠まれることが多かったけれど。（僕も古いですね。今どきそんな人は居ない。）

院展に日傘預けて入場す　紀子

秋暑のなか、上野公園を歩いてきた感じが「日傘預けて」に出ている。「預けて入場」にも素直な自然な良さとして読める。美術の秋と言えば引用される句に「二科を見る石段は斜に登る」（加倉井秋を）がある。二科も院展も九月初め、他の団体展に先駆けて行われるので、これらの句には夏の疲れがまだ残っている感じもある。

足弱に美術の秋も遠くなり　多美子

本当にそうである。但し、団体展を隅々まで見る人は少なく、大抵は著名作家の並ぶ第一、二室と知人の出品作を見て帰る。（僕は必要な時は会場で車椅子を借ります。目の高さが丁度いいし、楽に全体が見られますよ。）「足弱」は俳句では「女性の」の別称であったけれど、現在は女の方が強いので多分その意味で使う俳人は居ない。

黄落や絵を観て帰る地獄門　健二

「地獄門」はロダン畢生の総合大作であり、これが日本にあるのを見ると嬉しくなる。これは上野の西洋美術館で、常設陳列だけでも一通りあるし我々年配者は無料で見られる。前庭にある数々のロダンには黄落の秋晴が似合う。以上「美術の秋」を並べてみた。

大利根の長堤駆くる空は秋　高志

「大」利根と言い、「長」堤と言い、広々とした大景の中を、しかも「駆ける」のである。空は秋晴。爽やかで好ましい空間が提示されている。

秋鯖や黒潮幾重逸りきて　孝三

逸り来て、に秋鯖の身の締まり、鱗の輝きが伺われ、まだ生きている魚のようである。この鯖は幾条もの海流を乗り越えてきたのであろう、と。

火膨れのでき秋鯖の焼き上がる　みち

そうか、あれを火膨れというのか、と始めて感心した。席上で、鯖でなければ火膨れは出来ないだろう、と声があり、なるほどと思った。秋刀魚では出来ない、とも言う。大きくて脂の乗った秋鯖なればこそ、である、と。こんな発見があるのも俳人特有の眼であろう。

さまざまの思い出のあり遠い夏　昭七

さまざまの思い出、としか他人には言えない。また自分でもそれは悲喜交々であって錯雑し、遠い夏霞の彼方にある。今、この人生を想い、それら記憶の重層に支えられて自分がゐる・・という感慨と見た。還らざる思い出、という感傷は何故か何時も「遠い夏」のものである。

団栗の木が教養部の要　宏之助

即ち駒場の東大教養部である。著名な大学ではいずれも象徴的な樹木があるものである。東大では公孫樹、北

大ではポプラなどと。ここでは団栗なのか。立派な樫の木なのであろう。代々のエリート学生の勉学を見守りつつ、風格ある古木となっているのであろう。

一句鑑賞　　飯田孝三

火膨れのでき秋鯖の焼き上がる　　みち

初っ端「火膨れのでき」が目を射る。自席でみちさんに伺ったら、細身の秋刀魚などではこうはいかない、ジュクジュク焼汁を噴きこぼすだけ、秋刀魚の身幅ゆえの「火膨れ」。フーム鋭い。ふだん見馴れている筈の有様に改めて目を瞠ったのだ。海の青さが染みた溌剌の魚身が火に焙られ、みるみる膨れができ皮が剥がれる。「秋鯖」といえば、「秋鯖や上司罵るために酔ふ」（草間時彦）を思い出す。記憶にあるのは述懐の句ばかりだ。対して掲句は、日常身辺に取材してまざと目に物見せて胸懐深い秋の一句である。

房総の闇は濃からず烏瓜　　陽一

東京など大都会には闇がない。街明りのせいである。房総は山並もあるが海に囲まれている。暮れても海光に包まれ、きっと仄と明るい。「海くれて鴨のこゑほのかに白し」（芭蕉）。薄闇の空間に赤い「烏瓜」が懸っている、作者はそれを見つめている。陽一さんの故郷は和歌山、紀ノ國は木の國、そして海の國である。

黄落や絵を観て帰る地獄門　　健二

上野の国立西洋美術館の前庭に佇つ。ご存知同館は、先年、ユネスコの世界文化遺産に登録された、ル・コルビジュエの設計に係る現代名建築の一つ。その明快な白亜の館と重厚厳粛なロダンの大作地獄門との対照がいやはや圧巻。見返る四囲の樹木は黄落の盛り、まさに美術の秋である。今や方々に美術館があるが、上野の森ならではの紛れ亡なき美術の「秋」がそこにある。「や」が奏功。

梨届く大きいものからお裾分け　　正美

今や旬、梨の到来。掌にとると直ひたと生気が伝わる。採れたての果實だ。送り主は産地の身内か、近しい友人知人だろうか。早速ご近所、知り合いにお裾分け、粒よりの上物を撰り分ける。人様に差し上げるには、中でもよい品をと、祖母や母から躾けられ、育ったのである。今に生きるその心延えが嬉しい。日本の心である。身についた慎みが思わず口をついた一句である。

水槽を掬はれてゆく秋の鯖　　幸一

大方の歳時記では、「秋鯖」の傍題に「秋の鯖」はない。よって例句もない。「春雨」と「春の雨」との情趣の異同にも通じるだろう。掲句「秋の鯖」は先行する「ゆく」の気息の弛みに連動するたくまぬ口誦の間合い、けだし、

「秋鯖」の溌剌の気色はすでに見た。単なる語呂合せに終るわけではないのだ。上五「を」の働きも見のがせない。上中、散文風の緩い調べがその場のやりきれぬ思いを伝えているではないか。秋はペーソスの一句。

酒は剣菱秋鯖は塩焼きに　　**宏之助**

平成の宮本武蔵夕べ一酌の図。酒は辛口の誉れ高きその名も「剣菱」、肴は秋刀魚、いんや付き過ぎ。男一匹女々しくないか。ここはどんぴしゃり「秋鯖」で決まり。鯖は塩焼き、男は器量いや度胸。これに武蔵描く〇〇図ー残念、鳥の名を失念したーを背にすれば申し分なし。天下一品、剣豪独酌の手遊びの一幅である。

駒場吟行句会（9／15　駒場住区センターにて）　高志記

秋晴の朝十時過ぎ渋谷駅で敦子さんに逢い、駒場駅西口に出ると連衆の顔が見えた。孝三さんを待つみちさんを残してすぐ駒場小学校への細道を上る。キャンパスの境で孝三さんに出会い、ここから皆うち揃い教養部の正門まで行く。ここを母校とする孝三さんの説明を聞きながら歩いたが各人のペースで吟行する。一高の校章が透彫りで入っている正門を見て、一号館の時計台、右の博物館の間の道を抜けて銀杏並木道に出る。東向こうにあ玉杯に花受けての旧駒場寮跡に建つコミュニケーションプラザが見えた。前では女学生が屯していたが近くまで行かず銀杏並木を西に行く。煉瓦敷の道に銀杏が音を立てて落ちるのに出会う。見上げれば鈴生りの銀杏が見える。曼珠沙華の咲いている緑地通りを抜けて野球場へ出た。グランドを囲む土手に葉裏が白い芒坂カラムシが吹かれている。奥まで行って、水引草、牛膝ゐのこづちなどの雑草の茂る土手道を引き返した。道の奥に見えた座禅堂の板木まで行って叩く真似をして引き返した宏之助さん、これを即詠された半寿さん、たけ子さんの句の禅の立看板もあった。ようやく西門から通りへ出て駒場公園の近代文学館を目指す。道すがら、又句会場への道すがら孝三さんの石田波郷の駒場会館アパート時代の句（一高への径の傾く芋嵐）とその位置が何処*かの話があった。前田邸の和館をやり過ごし、文学館へ入る。去年下見に来た時は詩歌の特別展であったのか、三好達治、正岡子規、与謝野晶子など近代の詩歌があったが、この時は教科書のなかの文学――芥川龍之介「羅生門」とその時代という特別展であった。自筆の「野茨にからまるはぎのさかり哉」や死を決意するに至った時期から描かれた河童の絵という解説付きで「橋の上ゆ胡瓜なくれは水ひひきすなはち見ゆる禿の頭」の色紙を私は見た。他にたけ子さんの「蜘蛛の糸」の稿、みちさんの河童の絵及び電文**、敬司さんの鷗外の文字、順子さんの龍之介のそれ、半寿さんの芥川自死の新聞が展示物を描写した句であった。

展示してあった教科書には私が学んだ昭和33年版はなかった。皆々ここでの作句は難しいぐ〜とぼやきながら一階のカフェレストランで昼食をとった。珈琲には鷗外と芥川の名前が付けられてあった。宏之助さんと半寿さんは駒場野公園に先行された。その空いた席に一人の青年が来て私と孝三さんに挟まれた。遠慮したのか立とうとする素振りを見せたので、構わないよ一緒に話しでもしましょうと言って、話した。22歳の修士二年の東大生であった。私はいろいろ聞いたりアドバイスめいたことも言った。認知神経科学を専攻して町田の研究所で指導を受けている、博士課程に進むつもりとか、米国に留学も志しているとか、cognitive neuron science と英語で言うとかを聞いた。先にやり過ごした和館に立ち寄り、区のガイドに頼んで茶室を見せてもらった。板戸の絵は橋本雅邦によるものとか。句会の定刻に近いので急いで出て、駒場野公園のケルネル田圃を覗き、野草園を抜けて東大前商店街を通り、駒場住区センターにたどり着いた。

＊翌週の例会にて孝三さんの探索の結果を聞いた。今は老人憩いの宿となっていて、駒場1-26である。場所をグーグル地図で調べると、句会場の近くである。という事はそこへ至る坂道を波郷も下って芋嵐を見たのではなかろうか。これは私の推測。＊＊これは漱石が芥川龍之介の自殺を知って夫人に宛てたお悔やみ電文であろう。何故ならこれも翌週の朝日に二葉亭四迷の死を知った漱石が四迷の夫人に宛てたお悔やみ状が同地で展示されると載った、その文末に「痛嘆の至に不堪」とあるからである。

光成高志

一高の校章の門秋の蝉
音たてゝ銀杏落つる甃（いしだたみ）
河童の絵白眼の長し秋あはれ
神経科学（ニューロン）の学生に会ひ秋高し
ケルネル田圃金銀の鳥威

飯田孝三

学帽の廃るキャンパス秋日傘（パラソル）
秋蝉のキャンパス縮む背をかがめ
秋風や波郷大足大き下駄
駒場寮ジャズダンス向日葵咲く
秋草の径来（こみちき）凝らす見えぬ眼を

釜田敬司

キャンパスに銀杏落つ音響きけり
鷗外の文字の端正秋さやか
文豪の字に個性あり秋灯
小流に水引草（みずひき）の風立ち初めぬ
都心にも稲の実りてそよぎけり

加倉井たけ子

銀杏の匂ふ並木や風通ふ

閉ざされし旧屋「禅」の標あり
「蜘蛛の糸」稿の朱書の秋澄めり
秋草を抜け来て縁に座りけり
芥川てふコーヒー豆あり秋うらら

紋章を掲げ正門秋日燦
白粉花おしろいや古木の裾にひそと在り
銀杏の踏みしだかれて風渡る
前田邸紅葉しずもる古板戸
学食に母の味する茸汁

銀杏を踏みゆくキャンパスしずかなり
天高し野球部員のはずむ声
秋の日や訪う人もなき座禅堂
龍之介文字は人なり曼珠沙華
鹿の目を気にしつ食べる牛丼ランチ

抒情誌に野辺の挿絵や秋彼岸
露けしや電文「ツウタンニタヘズ」
読書の秋色紙半分河童の絵
教科書の半開きして秋灯
縁廊下畳の敷かれ秋日和

杉本こい乃

湧き水や糸蜻蛉をり手を水に
男が作る野外料理や草の花
靴片方石の上にある水引草
秋の風葉裏の白が波うちて
首だけを動かす鴉秋の雲

見上げれば銀杏の実鈴生りに
秋風の桜の大樹空おほふ
糸蜻蛉川の流れに身をまかせ
黒アゲハ赤彼岸花に飛び交ひて
草むらにひときは紅く水引草

谷田貝順子

Jアラートの後の吟行つくつくし
アパートの壁の落書秋日濃し
東大生の短パン雪駄秋の蝉
駒場には今も駿馬や秋高し
東大を出いでて白粉花おしろいばなに会ふ

光みち

桐一葉東大銀杏並木にも
薄紅葉塔の四面に時計あり
禅堂の板木ひと打ち秋深む
芥川自死の新聞そぞろ寒
駒場野のケルネル田圃かかし祭

田宮敦子

浅野正美

仲本興正

林半寿

キャンパスに銀杏の性さがふんぷんと
曼珠沙華割拠東大キャンパスに
秋晴の旧一高の時計台
酔芙蓉もキャンパスの花教養部
稔田の一穂いっすいづつが銭に見ゆ

佐藤宏之助

俳窓評論纂

＊朝日歌壇2017／8／14うたをよむ断片と瞬間の詩の題で島田幸典氏の論旨に共鳴した。俳句ではないが、佐藤佐太郎の没後三十年になる顕彰文である。純粋短歌と呼ぶ例歌に「夢殿をめぐりて落つる雨しづくいまのうつつは古の音」『群丘』（文語なので雨はあま、古はいにしへと読む）いま現に耳にしている音は、はるかな過去の雨音と同じだー発見と感動が名詞止めによって簡潔に表現される。「ひとところ蛇崩道じゃくづれみちに音のなき祭礼のごと菊の花さく」音量をゼロに絞って祭礼の美的印象を抽出する。意味ある断片や瞬間を清新な表現ともに差し出す―佐太郎はそのようにして近代短歌の〈写生〉理念を受けつぎ、自らのものとしたのである。短歌は長塚節や斎藤茂吉に限ると思っていたが、この人もその系列らしい。永田和宏氏がこのような自然詠を大切にしたいと右側の欄に書かれている。

＊みちさんが多美子さんから「杉」を借りた。私も読んだので後ろに多美子さんと紀子さんの句を載せた。主宰の潮さんの句は割愛するが、「無縫庵日録」に時事問題を書かれている。今新聞週刊誌などを賑わしている政治のこと、共謀罪、閣僚の失言、欺瞞的な言葉の乱発にやりきれなさを感じる、なんとか学園の無恥厚顔な教育理念など、私はあきれて、無視していたが、ここの主宰はよくぞ書いたものだと思う。

＊朝日の天声人語（8.19）芭蕉記念館で見た蕉門十哲展のことで、著者が基角、嵐雪ら門人の意外にどろどろした人間関係を知ったから弟子に関する本を何冊か読んだと。〈十団子も小粒になりぬ秋の風〉（許六）五位六位色こきまぜよ青すだれ〉〈黄菊白菊其外の名はなくも哉〉（嵐雪）〈いねくと人にいはれつ年の暮〉（路通）の句を紹介して自分の云いたいことを書いている。しかしその論旨がいかにも浅薄である。これらの句を読みとって蕉門一門の歩みをたどって浮かぶのは、残念ながら、鉄の結束などではない。むしろ自派の拡大に汲々とし、他派を牽制する男たちの姿である云々。これを今の組織に見られる人くさき営みと同じだと断じている。歴史を見るという事は己の鑑かがみに写してみている以上これが著者の今である。この文章が浅薄である。もっと風俗文選などの誄るいを読んで当時の芭蕉に触れた弟子たちを想像して書けば

いいのに。

＊三島由紀夫の最後の二冊の小説を読んだ。その勢いで豊穣の海四巻を全部読んだ。三島由紀夫の心が少しわかったような気分になった。本項で書けるほど簡単ではない。稿をあらためて書いておきたい。

＊以前陽一さんの紹介で孝三さんと講演を聴きに行った奥本大三郎さんが『完訳「ファーブル昆虫記」』（全20冊集英社）を完成させたと9.9の朝日文化文芸欄に載った。氏は虫好きで原著者のファーブルと同じく30年かけて翻訳したのだ。バッタの図をすらすら黒板に書いて説明されたのを記憶している。又自家を虫の館として昆虫の博物館に建替え解放している。一階にファーブルの生家を模した部屋にして、ファーブルの机を展示してある。その机が陽一さんの初句集の題名になっている。無論お二人はご昵懇であられる。

＊健二さんから大変なコピーを貰った。三島由紀夫　素顔の告白　という未公開インタビューの記録である。暁の寺を脱稿した昭和45年2月19日にジョン・ベスター氏と対談した80分の録音テープから書き起こしたものだ。今年の群像三月号に掲載された。中身を読むと目から鱗が落ちるという思いだ。言葉をもっともっと大切にせよ、小学生に『源氏物語』を教える、その一節をお経みたいにただ暗唱させる、それだけでも意味がある、漢文学の教養が衰えてきてしまった、論語を暗唱させる、ああいう行き方でなきゃあだめなんですよ、云々。私も大賛成の言葉です。（つづく）

受贈誌（H29年9月号）

秋暑し一里歩きてただ暑し　（彩136号）　平野ひろし
秋黴雨糶場十時にがらんどう　（〃）　〃
月おぼろ隣るベッドの尿瓶鳴る　（〃）　平山三郎
鼻先に薔薇薔薇園のチータイム　（〃）　河端不三子
初つばめ東尋坊に翻る　（〃）　遠藤惠子
網干場魚乾涸びる残暑かな（東京ク8月）　晴夫
軽やかにしやぼん泡立ち今朝の秋　（〃）　璃子
岸に寄す波の音なり霧の中　（〃）　文男
秋袷舞の師匠の三十年　（〃）　璃子
仁王像塗りの剥げ落ち草いきれ（東京ク9月）　万世遊
石佛の肩寄す岩屋秋の蝶　（〃）　守啓
寂寥や宵の口より虫の声　（〃）　璃子
石清水胎蔵界の洞に聞く（あすか8月）　山尾かづひろ
ほとばしる筧の清水馬頭尊（あすか九月）　〃
春日傘いつもの道をゆつくりと（杉48巻7号）　多美子
夏近し大樹に句帳開きをり　（〃　〃）　紀子
山尾かづひろ吟行ノート（H29.8.7～9.3）
教科書の子規の横顔衣被　飯田孝三

大満月たしかに兎餅を搗く　　〃
芋嵐帽子の鍔の翻る　　光みち
宵闇や足元灯す湯壺まで　　〃
台風過暁星座よく見える　　光成高志
竹山に代々住んで竹の春　　〃

賢治詩二篇　―「屈折率」と「くらかけの雪」の暗い予感―

武者昭七

賢治の第一詩集「春と修羅　第一集」（大正十三年一月）冒頭に次の二篇を据えている。ともに孤独と寂寥の影が濃い。

屈折率

七つの森のこっちのひとつが　水の中よりもっと明るく
そしてたいへん巨きのに　わたくしはでこぼこ凍ったみちをふみ
このでこぼこの雪を踏み　向うの縮れた亜鉛の雲へ　陰気な郵便脚夫
のやうに　（またアラヅジイン　洋燈とり）　急がなければならない
のか

くらかけ山の雪

たよりになるのは　くらかけつづきの雪ばかり　野はらもはやしも
ぼしゃぼしゃしたりくすんだりして　すこしもあてにならないので
ほんたうにそんな酵母のふうの　朧なぶきですけれども　ほのかな
のぞみを送るのは　くらかけ山の雪ばかり　（ひとつの古風な信仰で
す）

「屈折率」は賢治の愛好した科学用語のひとつで恩田逸夫氏によれば、水槽の中に入れた棒が実物よりも大きく屈折してみえる現象をいい、自己の人生の道路が常人と異なっていて平坦ではなく屈折した苦悩的なものであるという意味をふくんでいる、という。

「七つ森」は岩手山の麓の山。近くの道が明るく大きいのに作者は宿命のようにわざわざ暗く歩きにくい凹凸道を選んで暗い亜鉛色の雲の垂れ込める向うをめざす。背中に背負うものは「みんな」にくばるための郵便物だ。「みんな」がそれを待っている。「みんな」を幸せにしたいという義務感が困難な道をあえて急がせる。陰気な郵便脚夫の足取りに絶えず「みんな」の幸せという理想を求め続けた賢治の人生が重なってくる。

賢治はその出発からすでに暗く厳しい自己の全人生を予感していたのだ。周囲の反発や無理解に対する絶望感。自分を支えてくれるものは「くらかけ山の雪ばかり」といい、「古風な信仰」というあたりに賢治の孤独を支えてくれたものがなんであるかがほのみえる。さびしい詩である。

芭蕉のかるみ以後（37）　　光成高志

うき世に泥（なづ）む寒食（かんじき）の痩　　角

寒食（かんじき）とは何か。中国では寒食節という祭日で今に残ってい

る。寒食節の起源は次のような歴史物語に由来するそうである。今を去る二千年ほど前の春秋・戦国時代に、晋国の君主・晋の献公の息子の重耳は、迫害されて外国に逃れ、十九年間も流浪生活を送り、数え切れない辛い目にあった。彼に従っていた者たちは、その苦しさに堪えかねて、大方は自分たちの活路を求めて離れていった。ただ介子推とその他五、六人の者が、忠義の心厚く、苦しみを恐れずにずっと彼に従っていた。重耳が肉を食べたいというと、介子推はひそかに自分の腕の肉を切りとって、煮て彼に食べさせた。のちに重耳は秦国の国王・穆公の助けをえて、晋国の国王になった。重耳はずっと自分に従って亡命していた者たちに論功行賞を行い、それぞれ諸侯に封じてやった。介子推は母親と相談して、富貴を求めない決心を固め、綿山に入って隠居した。その後、晋の文公・重耳は彼のことを思い出し、自ら車に乗って捜しにいったが、なん日捜しても介子推母子の行方はわからなかった。晋の文公は介子推が親孝行なのを知っていたので、もし綿山に火を放ったならば、きっと母親をたずさえて山から逃げ出してくると思った。けれども介子推は功を争うより死を選んだ。大火は三日三晩燃えつづけ、山全体を焼きつくした。文公が人を遣わして見にいかせたところ、介子推母子は一本の枯れた柳の木に抱きついたまま焼死していた。文公はこの母子の死を心からいたみ、綿山に厚く葬り、廟を建立し、介山と改名した。そして介子推の自分に対する情誼を永遠に記念するために、その柳の木を切りとって持ち帰り、木のくつを作らせ、毎日眺めては悲嘆にくれた。「悲しきかな、足下よ！」のちに人々は、自分に親しい友人に手紙を送る時、「××足下」と書いて、厚い友情を示すようになった。晋の文公は、介子推の生前「士は甘んじて焚死しても公侯にならず」という志を通した高尚な人となりをたたえて、この日には家ごとに火を使わず、あらかじめ用意しておいた冷たい食べ物を食べるように、全国に命令をくだした。長いあいだにこれが次第に風習と化し、独特な「寒食節」となって受けつがれた。寒食の日には、人々は先祖の墓に詣でて故人をしのび、亡き霊を祭ることにしている。以上は某氏のブログから引用したが、一番詳しいのは現俳協の超弩級季語探求の一つで二〇一三三七小林夏冬氏のブログである。望帝杜宇の怨みを介子推の怨みに転じて、その霊のほととぎすが盛んに鳴いているが、世間の人々はそんな事は知らず、寒食に痩せながらこの世に執着している。あるいは寒食の業をして痩せた偉い人でも浮世のことが忘れきれないでいるという解釈もできるが、基角は中国の故事を当時の風習に引き戻して市井の人を茶化したのではないかと思う。芭蕉のほととぎすの怨みといい、それを受けた基角の寒食の痩せといい、当時の俳諧師の蘊蓄というより常識であったのだ。それを打てば響くように出せるのが基角の凄い才だ。

沓は花貧重し笠はさん俵　　蕉

寒食の痩せの中国の故事から離れて、実際に冷たい食を貰って飢えを凌ぐ乞食が花を沓にして、重病の貧に苦しんでいる。かぶっている笠はさん俵であるよ。どこから思いついたというと、詩人玉

屑所収の閩僧可士作の「笠ハ重シ呉天ノ雪、鞋ハ香シ楚地ノ花」の漢詩はよく知られたものでこの詩をもじったのである。基角の「我雪とおもへば軽し笠のうへ」もこの詩の逆を云って有名になった。さん俵は俵の左右を閉じる蓋であって使い古しの俵から剥がしたものだろうと思う。

芭蕉あるじの蝶丁（タヽク）見よ　　角

前句の風狂人を芭蕉庵の主と見ての親しみの情を籠めた戯れの付け。「蝶たたく見よ」は荘子の夢の中で胡蝶になったという寓話を踏まえている。これも人口に膾炙した寓話であり、夢の中で胡蝶になった荘子を叩き殺す芭蕉を見よという気迫を詠んだ。荘子によって開眼した芭蕉はさん俵をかぶって花の上を歩いている乞食であると基角が見立てた。それでも新境地を開くには荘子を叩き殺すくらいの気迫を我師はお持ちであるという基角の師讃ともとれる。

腐（クサ）レたる俳諧犬もくらはずや　　蕉

前句で直接呼びかけられた芭蕉が間髪を入れず応じた勇ましい付け句である。深川に芭蕉が移住して鹿島の根本寺住職仏頂禅師に禅を学んだ成果を後に基角が『芭蕉翁終焉記』に書いている中に、芭蕉のことを一気鉄鋳生（いなす）いきほひなりと書いてゐる、その「一気鉄鋳生（いなす）いきほひ」で詠んだのだ。鋳生は鋳物を型に流す勢いという事をいう基角の造語。先に白炭の句が白石や芭蕉にあると書いたが、この時代の学問をした人は白炭や鋳物のような今では文学に無関係のような事も常識としてもっていたのだ。現代と比べて大変な違いである。鋳物を知っているという事は叩いて造る刀などの打物も知っていた筈である。古代から伝わった鋳造（casting）を知識として、その特徴を自分の文章に生かしているのだ。奥出雲で見たたたら製鉄のビデオ、君津の製鉄所で見た圧延工場のローラーの上を走る赤い鉄、それに坂出で見たアルミ鋳造の様子などまだよく覚えている。高温の液体の鉄が流れる鋳生（いなす）勢いで俳句を作ったという基角の芭蕉讃には驚くばかりです。去来抄にも俳諧は日頃に工夫を経て、席に臨んで気先を以て吐くべしとか三冊子には気先をころせば、句気にのらず、先師も俳諧は気にのせてすべしと也、とか気について書かれてあるのもこれと同工異曲であり、去来が近江の正秀亭でもたもたして発句を出せなかったこと、第三句に脇の位をしらずのんびりした句を付けたことを夜すがら叱られたと書いてあることもこの気合を以て作れという芭蕉の教えに通底する思想である。

お便り広場（到着順、敬称略）

残暑お見舞い申し上げます。天候がおかしいと花も実も常のとおりには生育せずことしは全て番狂わせです。白金葭の方々は暑くても寒くても皆さんご熱心ですね。昔、火星の東京句会は八月は休んでいました。大阪は夏季の何とかくとか暑くても一生けんめいでした。当東京クラブも夏休まずです。

（8.14　璃子）

九月になり急秋の気配を少しだけ感じられる今日でした。無花果ありがとうございました。夕方に着いたのですぐ夜ご飯のおかずにしました。無花果甘いです。ありがとう感謝します。忙しい毎日なのにほんとうに畑までするのはたいへんですのに努力して暮らしているのが感じられます。モロヘイヤ、オクラも夕食にしました。おいしかったです。取りたてでスーパーのと味が違いますね。奈良行き楽しみにしています。元気で行かれる様に体のコンディションを気をつけてと思っています。皆様お体に気をつけて下さい。（9.2 幸子）

秋冷とまでは行かずともとりあえずよい季節の幕明けとなりました。お変わりなく子供のような白金葭のお世話お忙しくしていらっしゃると存じ上げます。私共も、少人数ながら毎月一回の句会を楽しんでおります。今年はどんぐり豊作のようで、去年は大不作でしたので、近くに熊さんでも出没すれば良いのにと思います。東京クラブ会報（九月）お送り申し上げます。お大切に。ご健吟願っております。（9.11 璃子）

私は今まであまり祖父との深い関係を築けていなかった。なぜなら、家が遠いうえ、受験があったので頻繁に会えていなかったからである。しかし、このレポートの取材を通して、改めて祖父の尋常でなさに気づかされた。幼いとき戦争の辛い経験がありながら、貧乏な家に頼らず学問にのめりこんでいった芯の強さに私は驚嘆した。私は今まで一つのことに深くのめりこんだことがなかった。しかし、「学問」という一つの分野を突き詰めていった祖父の姿を知り、私は今まで何にも夢中になれていなかったことを後悔するとともに、その難しさを実感した。まだ夢中になれるものは見つけられていないが、成長していく過程でみつけられるように努めていこうと思う。（9.20 草太）

何時もお世話になっております。先日の句会では「舞踏会の手帳燕は南国に」という変な句（？）を出してしまって弁解させて頂きたく（以下略）（9.27 陽一）

（本誌では自句自解は掲載しないことにしております。編集子）

右の通り九月の一句鑑賞の駄文をお送りいたします。お目を悩ませ恐縮ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。御夫妻とも御身お大事にご清吟下さい。（9.27 孝三）

（読めない箇所、冗長なところなどをカットしました。悪しからず。編集子）

我孫子日記

＊	9/1 駒場・松濤美術館
＊2	9/3 大宮シティホー
	9/12 太極拳
＊3	9/15 駒場吟行句会
	9/20 SOA(1)
	9/22 例会

＊上り来て秋風に会ふ能楽堂　みち
秋は美術の木版捺染を観たり　高志
美術の秋捺染の版木微細なる　〃
美術の秋印度の布地長垂らす　みち
＊2初秋や子らの合唱コンクール　高志
＊3桐の実や博物館に足向かず　〃
揚羽蝶蜜を吸ひをり曼珠沙華　〃
一本の野草の中の曼珠沙華　〃
灯火親しむ教科書の羅生門　みち
枕木の積まれて朽ちる曼珠沙華　〃

編集後記

毎月後記を書く時は一区切りがついて快い休息が訪れるのであるが、今月は少々不快である。何年芭蕉の軽みを探ったって、山口誓子の句を云ったって、誰も誰も故人の句を読みはしない。日新なりではない。俳句と人生別々に置いていい句が出来る訳がない、などという思念が湧くからである。でもまだまだやり残したことがあるので、気力を新たに頑張る。

白金馥9月号（通巻第七九号）平成二九年9月28日発行
編集・発行人　光成高志 ☎・fax　〇四―七一八七―一〇六八
発行所　二七〇-一一一九　我孫子市南新木二-二四-一七
印刷所　（株）ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房
〒九五〇-〇八〇一　新潟市東区津島屋七-二九
☎　〇二五（二五〇）九六六六
表紙紙の題字：加納綾女　同写真は9月28日の白金馥